
同窓会

四方保 創也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同窓会

【Zコード】

Z2304BA

【作者名】

四方保 創也

【あらすじ】

一人の男が開いた、何の変哲もない同窓会。何の変哲もない、がしかし、文の所々の不自然な点を繋ぎ合わせると、悲しい事実が浮かび上がる・・・。

サスペンスっぽいですが、かなりスケールは小さいですよ。

(前書き)

単純な超短編です。

『卒業して十五年がたちました。久々に一年四組のクラスで集まつて、楽しく昔話に花を咲かせませんか？』

はがきを握る手袋は厚く、吐く息は白い肌寒い冬の日。

恐らく自虐的であるう笑みを浮かべながら、時には重く、時には軽くなる足を動かし続ける。

当然、向かつてているのは同窓会会場だ。

僕は、同窓会のような騒がしいイベントはあまり好きではないし、心の中では引き返したい衝動に常に駆られ続けているが、引き返すわけにもいかない。柄ではないが、幹事は僕なのだ。

短く吐き出される白い息が、次に一際長い尾を引いた。

到着。何の変哲も無い、同窓会にふさわしい、和風の飲み屋。選んだ理由は、値段がありがたいものだったからだ。

「〇〇高校同窓会会場」と書かれた札の部屋からは、特に何の音も無しの静寂が潜む。

襖を開け、一人席に着く。席にはビールとコップ簡素な料理。時間が、ちょっと早いからかな。

柄にもなく、指定時間より三十分弱。幹事だからか。将又否か。少し、眠ろう。

騒がしい喧騒が、意識をつづく。まぶたの隙間を無理矢理広げる。

「おっ、起きた起きた」

「何やつてゐの、幹事のくせに」

ガバッと一気に体を起こす。田を見開いたその先の光景に、僕は茫然となつた。

「授業中でも、良く寝てたよな。」
「いいつ」

「そういえば、そうね」

嘘か？夢か？幻か？

「な～んて顔してるんだよ、面白れえなあ」

「呼んだのはそっちでしょ」

まあ、いいか。てきとうに受け入れて、生きてきたし。

「ごめんごめん、皆来てなかつたからさ。一眠りしてたんだよ」笑つて、答えた。

各々の昔話に花が咲く。

あの時はこうだつた、あんな事があつた、こんな事があつた。もしも音で花が咲くなれば、会場はお花畠だ。

突然、左肩に手が回つた。左を見ると、本田のにやにやした顔があつた。昔はこいつと、よく音楽の話をしたつけな。

「そういえばお前、残念だつたなあ」

何がだよ、と肩の手をどける。

「修学旅行だよ。動けない程風邪ひいて、ベットでうんうん唸つてたんだろう？」

会場に一瞬、静寂が走つた。が、一瞬で助かつた。

「楽しかつたのになあ、バスでのカラオケ大会」

「あんたの歌が一番酷かつたでしょ」

「そういう夏子は凄く上手かつたよね。歌手になれるよ

「なにい、俺だつて上手かつただろ」

たちどころに喧騒が湧く。

「僕だつて行きたかつたさ。這つてでも行くつもりだつたんだぜ？」
はははつ、と本田が爽やかに笑つた。この笑い方が、僕は昔から好きだつた。

「しつかし、大人っぽくなつたなあ。服とか、さ」

今度は、右肩に手が回つた。篠田の嬉しそうな顔。篠田ともよく話したし、いろんな所に遊びに行つたつけ。

「まあ、面影は残つてるな。一日見てお前つて分かる

「まあな。そっちは全く変わらないな。面白みに欠けて残念だ」
当たり前だろ、と答えた篠田の方が、なかなか大人びた笑いを浮かべる奴だ。

「そういえば、結局どこ進学したの？ 確か、××大志望だったと思うけど。受かったの？」

声の主は前の席の西野。クラスで成績トップだった女子。

「結局偏差値が足らなくて、ちょっとレベルの低い 大にしたよ
「へへ、凄いね。あそこも結構レベル高いのに」

西野の偏差値とは十程度差があるだろう。しかし、それを素直に褒められるのが、西野のいい所だ。

「それよりさ～」

ビールの瓶を振りながら、山崎が言った。

「俺達にビールを出すってどういう事だよ。飲めないぞ、俺は」

「いや、同窓会と言つたら、ビールがいいと思つて。ジュースか何か頼むか？」

「や～ま～ざ～きい～」

顔を真っ赤にさせた渡部が、妙にフラフラしながら立つた。もう飲んでるな、こいつ。

「いいじやんか～。俺達がビールを飲んではいけない理由は無いだろ、つとつと」

倒れた。昔から、こいつは良い意味でバカだった。

「よつしやあ、飲んじゃうぜえ！」

岡野が叫んで立つたかと思うと、手に持ったビールに口を付け、一気に傾ける。

「やるかあ岡野！俺と一気飲み勝負だ！」

復活した渡部と岡野による一気飲み対決が始まると、それを他の皆がはやす。この一人は、学年でもトップクラスのバカコンビだった。止めるべきか一瞬頭によぎつたが、委員長の斎藤も離子に参加しているのを見て、やめた。それに、ここから死者が出るような事があつたなら、それはそれで面白い。

そしてそれを皮切りに、皆がビールに口を付け始めた。

もう酒を経験してそうな奴も、酒とは無縁そうな真面目な奴も。男も女も、飲んで飲まれ、てんやわんやの大騒ぎとなつた。

突然踊りだした奴が現れ、かと思えば隅ですでに眠りについてしまつている奴もいた。

酒の勢いに任せ、実はあなたの事が好きだったのと告白する奴がいれば、あの時の犯人は私だつたのと告白する奴もいた。見る事の無かつた、酒の入つた一年二組の姿に、ほろ酔い気分の僕の顔から笑みがこぼれる。

そんな僕に告白してきた奴がいて驚いたり、かと思えば僕の弁当をつまみ食いしていたと告白してきた犯人に殴りかかつたりと、もう夢中で何が何やら分からぬで騒いだ。

一年四組の中で、一年四組を懐かしみ、一年四組を満喫し、一年四組を感じ。

僕は、一年四組だつた。

満ち沈む静寂の中で、意識が覚める。まぶたの隙間が、僅かに開く。

まだ霞みが残る目をこすり、ゆっくりと辺りを見回す。そこに広がつているべき景色に、呆然となる。

時計を見れば、指定していた時間からすでに三時間が経過していた。

何一つ変わらない。僕以外の誰一人いない。

嘘か？夢か？幻か？

無音、静寂。

一人、孤独。

・・・まあ、いいか。てきとうに受け入れて、生きてきたし。

ありがとう、皆。

涙で、言えなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2304ba/>

同窓会

2012年1月5日21時46分発行